

トルコ、カッパドキアの人工洞窟の調査
—宗教洞窟・絵画洞窟・地下洞窟—
肥塚 義明*・沢 黙**
Investigation of Artificial Cave in Cappadocia Turkey
—Religion Cave, Art Cave, Underground cave—
Yoshiaki KOEZUKA*, Isao SAWA**

ABSTRACT

The artificial caves in Cappadocia are cave church, cave private house, cave hotel, cave restaurant, and underground city. There are a religion cave, a refuge cave, a sightseeing cave, a storage cave, a habitation cave, a cemetery cave, a ruins cave, an art cave and a pictures cave, and an altar cave in the relation between a cave and a human being. This can be said to be the feature of Cappadocia that a cave has close relation with man.

The believers deepened faith at a cave church and a cave monastery. There is the Christianity cave church in Cappadocia more than 1000 places. Goreme is said in the center where the faith of the cave church was the most prosperous, and cave church crowds. It is said that there is the underground city in Cappadocia more than 100. The Kaymakli underground city confirms to the 8 floor under the ground, and the 4 floor under the ground is shown for sightseeing.

Key Words: Religion Cave, Art Cave, Underground Cave

[洞窟環境NET学会紀要創刊号] [Cave Environmental NET Society(CENS) , Vol.1(2010), 43–48pp]

1. はじめに

トルコ共和国は、黒海と地中海に囲まれたアジアとヨーロッパを繋ぐ位置にあり、様々な民族が往来した歴史を持つ文化の交差点である。面積は日本の約2倍の774,815km²で、人口は71,517千人(統計機構、2008)である。首都はアンカラでトルコ語が主要言語である。国民の99%がイスラム教徒であり、いたる所でモスクを見かけるが、本稿で取り上げる洞窟教会などはキリスト教信仰が盛んであった頃の遺跡である。

世界遺産に登録されているカッパドキアは、首都アンカラの南東約280kmにあり、海拔1,000mを超す高原地帯である。「カッパドキア」とは、都市名ではなく地域一帯を表す地名であり、アクサライ、ネヴシェヒル、カイセリ、ニーデなどの県が含まれる約2,500km²の土地を指している(図1.)。

洞窟とは、「人が入ることの出来る地下の空間」と定義される。成因別には自然洞窟、人工洞窟および混成洞窟に分類できる。自然洞窟には、火山洞窟・侵食洞窟・溶食洞窟・構造洞窟・風化洞窟などを含め約30種類がある。人工洞窟には、鉱山坑道・トンネル・地下施設などを含め約50種類がある。これら人工洞窟の中には、世界遺産に認定されているものもあり、興味深い研究対象である。

本稿で取り上げるカッパドキアの人工洞窟は、洞窟教会、洞窟民家、洞窟ホテル、洞窟レストラン、地下都市である。これらを洞窟の分類基準(沢、2003)の人間関係に当てはめると、宗教洞、避難洞、観光洞、貯蔵洞、居住洞、墓地洞、遺跡洞、芸術洞・絵画洞、祭壇洞と多くの項目が該当する。これは、人間と洞窟が密接な関わりを持つカッパドキアの特徴と言えるだろう。

* NPO法人洞窟環境NET学会理事 **大阪経済法科大学名誉教授



図 1. カッパドキア(Cappadocia)

2. カッパドキアの大地と洞窟教会

2.1. カッパドキアの大地の成り立ち

カッパドキアは、ユネスコの世界遺産「ギョレメ国立公園とカッパドキアの岩石遺跡群」として登録されている。この地域に広がる独特の奇岩の風景は、エルジイエス山(標高 3,916m)などの噴火により吹き上げられて堆積した火山灰や溶岩の浸食によるものである。カッパドキアは何千万年前からの火山地帯で、大小様々な規模の噴火が続いていた。この火山の活動期における噴火によって、火山灰が降り積もってできた凝灰岩の層と、溶岩が流れてできた玄武岩の層がそれぞれ形成されて大地が多層化した。

こうした凝灰岩と玄武岩の多層構造への浸食によって、カッパドキア独特の荒野と奇岩の大地が形成されたのである(図 2.)。この地域は季節により寒暖の差が激しく、雨や雪解け水などが一時的に強い流れをつくることがある。それに加えて、強い風が吹くなど奇岩を形成する要素が多くあったと考えられる。カッパドキアの奇岩には、円錐型、尖頭型、円柱型と様々な物(図 3.)が見られ、「妖精の煙突」と呼ばれるキノコ型の奇岩(図 4.)はこの地域のシンボルとなっている。



図 2. カッパドキアの独特的な大地



図 3. 独特な岩肌と様々な形の奇岩



図 4. キノコ型の奇岩「妖精の煙突」

2.2. キリスト教信仰と洞窟教会

現在のトルコの主要な宗教はイスラム教である。しかし、カッパドキアにはキリスト教信仰が盛んであった痕跡が数多く残されている。この土地は、シルクロードの通商ルートが東西南北に交差する位置で、様々な人々が往来しており、キリスト教の信仰と布教活動においても重要な拠点であったと考えられるのである。

キリスト教徒達は、3世紀頃から4世紀頃にはこの土地へ定着して信仰活動を行っていたとされる。この土地特有の奇岩に穴を掘り、キリセと呼ばれる洞窟教会や洞窟修道院を築いて信仰を深めていた。洞窟教会は、大小様々な規模の物があり、シンプルな穴ぐらから芸術的な聖堂まで多種多様な物が存在する。少人数で隠遁生活を行いながら信仰していたと考えられる小さな教会(図 5.)や、特徴的なドーム型の天井に色鮮やかなフレスコ画が描かれている教会(図 6.)、共同生活が可能な居住空間がある修道院(図 7.)、大規模な聖

堂のある教会などである。これらのキリスト教洞窟教会は、カッパドキアに 1,000 ヶ所以上あると言われている。洞窟教会は、奇岩を形成している凝灰岩を掘って造られている。凝灰岩は比較的やわらかい岩石であり、大がかりな建築道具を持たない修道士や信者達だけでも作業ができたと考えられる。

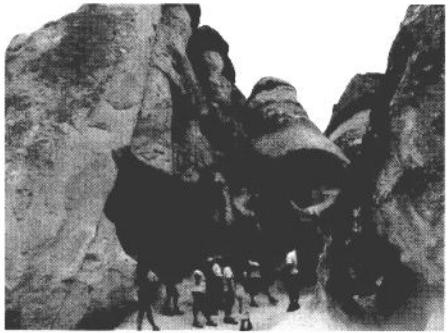


図 5. 内部が小さな教会の入口



図 6. 特徴的なドーム天井とフレスコ画

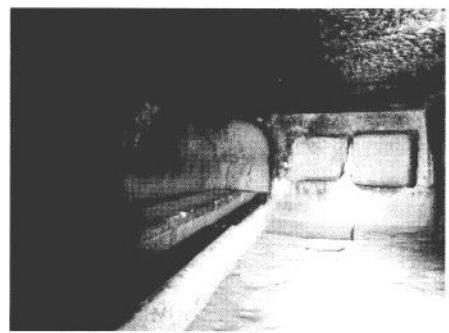


図 7. 長い岩テーブルがある食堂

2.3. ギョレメ野外博物館

ギョレメはカッパドキアの中央部に位置し、奇岩の多い渓谷地帯である。ギョレメと名付けたのはイスラム教を信仰するトルコ民族で、「見てはならないもの」という意味がある。奇岩に満ちた異様な風景と、キリスト教信仰が盛んであった異教徒の土地をそう名付けたのであろう。実際に、ギョレメは洞窟教会での信仰が最も盛んであった中心地といわれ、相当数の洞窟教会が密集していたとされる。

ギョレメ野外博物館は、洞窟教会が密集していた一部の地区を保全して博物館として公開している(図 8.)。傾斜のある谷に、山のような奇岩が多数存在し、保存状態の良い洞窟教会を見学することができる。ここでは、約 30 の洞窟教会が公開されており、11 世紀頃の教会が中心である。公開されている洞窟教会内部の建築様式と装飾は見事で、ドームやアーチを組み合わせて造られた天井、長方形の壁に列柱を用いたバシリカ様式が取り入れられた教会が多数存在し、天井や壁にキリストや聖人達を描いた色鮮やかなフレスコ画が見られ、神聖な中にも芸術性を感じさせる。

ギョレメ野外博物館から約 300 メートル離れた場所にあるトカル・キリセはカッパドキア最大の洞窟教会である。この教会も保全、修復して公開されており、野外博物館と共にチケットで見学できる。トカル・キリセは、旧教会(図 9.)と新教会(図 10.)の 2 部分の大聖堂で構成されており、地下礼拝堂と墓室も備えている。教会内の巨大な天井と壁面には、色鮮やかなフレスコ画が描かれており、受胎告知から昇天までキリストの生涯が描かれている。



図 8. ギョレメ野外博物館



図 9. トカル・キリセ旧教会、奥が新教会



図 10. トカル・キリセ新教会のフレスコ画

3. 現代にも息づくカッパドキアの人工洞窟

3.1. 洞窟民家

カッパドキアでは、観光や調査用の遺跡として洞窟教会が利用されている。しかし、この地域では人工洞窟を生活の場として利用する人々が今でも存在し、洞窟と人間の深い関わりが脈々と息づいていることが確認できる。

図 11 の洞窟民家は、巨大な奇岩を掘削した穴を居住用の空間として利用している。民家の窓や入口は、洞窟教会を連想させる。調査に訪ねた民家は、いくつかの巨大な奇岩を所有しており、居住用の岩や応接用の岩、物置の岩と用途別に使い分けていた。また、図 12 の民家前には広い畑が広がり、そこで、カボチャ、スイカ、ブドウなどを栽培していた。図 13 の岩石は玄武岩で、約 20 年前に井戸を掘った際に出てきたと言う。地中から玄武岩が出たことによって、この土地が凝灰岩と玄武岩の多層構造となっていることが確認できる。



図 11. 洞窟民家外観



図 12. 洞窟民家前の畑でスイカを持つ女性

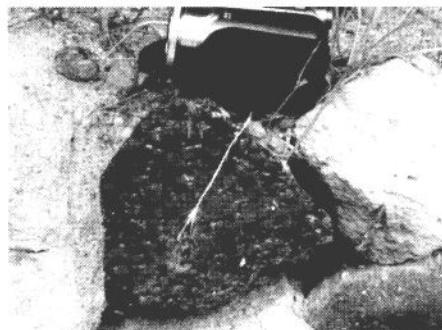


図 13. 井戸を掘った際に出た玄武岩

3.2. 洞窟レストラン

人工洞窟は、居住用だけでなく観光にも利用されている。大きな岩を掘削して造った空間を飲食店として営業し、洞窟レストランと呼んでカッパドキア観光の名物となっている(図 14., 図 15., 図 16.)。

3.3. 洞窟ホテル

洞窟ホテルも開業されており、この地域特有の奇岩を利用した人工洞窟での宿泊が体験できる(図 17.)。ホテル内部は凝灰岩の岩肌であるが、照明や絨毯など内装の工夫で温かい雰囲気を演出している(図 18., 図 19.)。

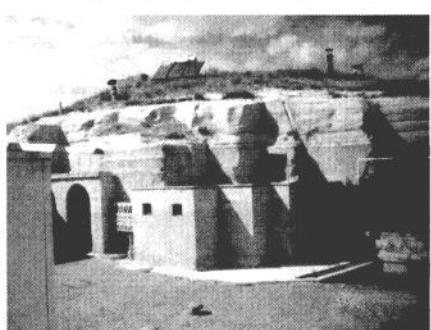


図 14. 洞窟レストラン外観



図 15. 洞窟レストラン内部は岩の空間



図 16. 岩でできたテーブルや椅子

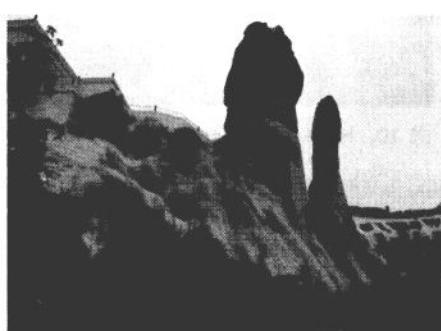


図 17. 妖精の煙突を利用した洞窟ホテル

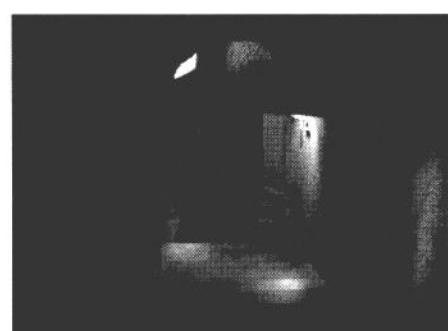


図 18. なめらかな岩肌のホテル階段



図 19. 洞窟教会を連想するアーチ天井

4. 忘れ去られていた地下都市

4.1. カッパドキアの地下都市

カッパドキアには、地下都市と呼ばれる大規模な人工洞窟が多数存在する。これらは、地下に造られた人工の遺跡であるが、広く知られるようになったのは 1967 年以降である。1965 年に、トルコの考古学者ヒクメット・ギュルチャイとマホムット・アコクが調査を開始し、その 2 年後に地下都市の存在を公表した。

地下都市は、祭壇や礼拝所、食堂や寝室と言った生活空間としての設備だけでなく、学校や仕事場、集会場と思われる部屋など都市と呼ぶのにふさわしい多様な空間を持っている。また、通気孔や汚水処理機構などの高度な設計と、外敵の侵入を察知したであろう見張り台や、通路を遮断するための円盤状の石扉を備える(図 20.)。このような地下都市は、カッパドキアに 100 以上あると言われている。

これだけ大がかりな地下都市であるが、いつ頃どのような人々が、どのような生活をしていたのかは解明されていない。キリスト教徒が迫害を避けて共同生活を行っていたとか、一時的な避難施設であったなど諸説あるが、はっきりとした研究結果は発表されていない。それは、地下都市の存在が人々の記憶に残っていなかった上、参考となる文献がなく、地下都市内部に検証できるような壁画や文字、生活の痕跡が残されていないからである。

4.2. カイマクル地下都市

カイマクル地下都市は、カイマクル町のほぼ中央に位置する丘の地下に広がっている。不定形ながら地下 8 階までの構造が確認されており、地下 4 階までが観光用に公開されている。ここは、約 40m の通気孔を備え、地下で長期間生活できるように様々な設備が備わっている。葡萄酒醸造所や食料庫もあり、地下空間は醸造や貯蔵庫としての利用にも適していたと考えられる(図 21.)。ここでは、1 万人を越えるキリスト教徒が共同生活していたとも言われるが、実際は数千人規模での生活が行われていたと考えられる。

地下都市の通路は狭く、人が一人で屈んで進むほどの広さしかない(図 22.)。しかし、9km 先のデリンクユ地下都市とも繋がっている通路が発掘されていると言われ、地下都市の全貌と真相は未だに解明されていない。



図 20. 地下都市の部屋と石扉(中央円盤)



図 21. 葡萄酒醸造所を案内する看板

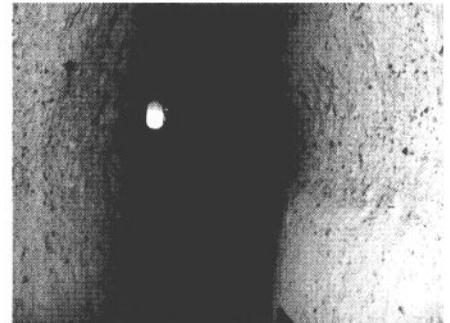


図 22. 地下都市の狭い通路

5. おわりに

トルコ カッパドキアを訪れて驚くのは、どこまでも広がる荒々しい大地と奇岩である。1 日の中でも気温の差を感じられ、季節の変化を考慮すれば厳しい自然の大地と呼べる。しかし、過去の様々な洞窟遺跡や、現代にも続く洞窟民家の生活を見れば、ここが不毛の大地ではないことに気づかされる。日本では感じることができない、自然と人間との共生の歴史と知恵を得ることができた。

最後ではあるが、問題点についても報告しておきたい。地下都市や洞窟教会の壁面や壁画には、落書きという環境破壊が散見された。観光地となった遺跡の宿命とも言えるが、環境保全の難しさを改めて認識する光景であった(図 23., 図 24., 図 25.)。

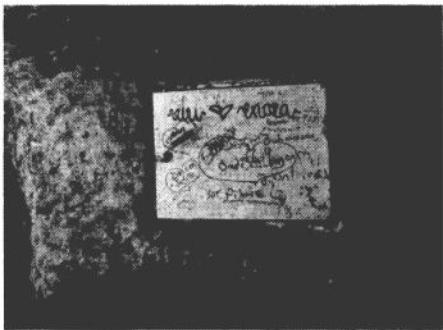


図 23. 地下都市の案内板への英字落書き

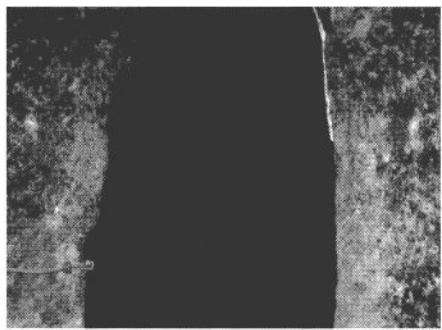


図 24. 地下都市壁面の破壊(英字落書き)



図 25. 自然劣化以外の破壊(英字落書き)

(2010年1月15日受稿、2010年1月25日掲載決定)

参考文献

- 1) トウルハン・ジャン・清水万里子訳:『トルコ オリエントへの扉ー』、ORIENT、239P、1994。
- 2) 立田洋司:『カッパドキア 一はるかなる光芒ー』、雄山閣出版、250P、1998。
- 3) 大村幸弘・大村次郷:『世界歴史の旅 トルコ』、山川出版社、170P、2000。
- 4) 大村幸弘・大村次郷:『カッパドキア 一トルコ洞窟修道院と地下都市ー』、集英社、117P、2001。
- 5) 中崎茂:『観光の経済学入門 一観光・環境・交通と経済の関わりー』、古今書院、239P、2002。
- 6) 溝尾良隆:『観光学 一基本と実践ー』、古今書院、149P、2006。
- 7) ムラット E:『カッパドキア』、デュンヤ・トゥリズム・テクスタイル、100P、2008。
- 8) トルコ共和国大使館 政府観光局:<http://www.tourismturkey.jp/>、2010年1月現在。
- 9) 日本貿易振興機構(JETRO)トルコ情報: http://www.jetro.go.jp/world/middle_east/tr/、2010年1月現在。